

係り結びのかかりの弱まりー琉球方言の係り 結びを中心にー

内間, 直仁 / Uchima, Chokujin

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

223

(終了ページ / End Page)

244

(発行年 / Year)

1985-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002791>

係り結びのかかりの弱まり

—琉球方言の係り結びを中心に—

内間 直仁

I はじめに

中古を中心とする古典語に、係り結びの現象があるということは、すでによく知られている。すなわち、ゾ・ナム・ヤ・カは連体形で、コソは已然形で結ぶという現象である。

この係り結びがどのようにして成立したのかということについては、これまでのいくつかのすぐれた論文によって、かなりの部分まで明らかにされてきている(注1)。しかし、一方、この係り結びは室町時代を境にして江戸時代までには消滅してしまうが、その消滅の理由については、今のところ明確にされたとはいいがたい。

係り結びがなぜ消滅したのかということについて、たとえば、ゾ・ナム・ヤ・カの場合は、室町時代に連体形が終止のはたらきをも兼ねるようになり、連体形と終止形が同形となったため、連体形で結ぶという意味が失われたからだとみる説がある(注2)。コソの場合は、院政・鎌倉時代あたりから「コソ—已然形」の規則を破る「破格」の文例が増加していくことについての説明はあるが(注3)、なぜ破格という現象が起きてきたのかということについての説明はなにもない。

これに対して、係り結びの消滅は、むしろゾ・ナム・ヤ・カ・コソの助詞がかかりの力を失った結果だとみる説が最近出されている

(注4)。

係り結びの消滅という現象を説明するのに、これら二つの説のうち、どちらがよりすぐれた見解であろうか。幸い、琉球方言には、ゾ、カにあたる助詞に係り結びの現象が認められる。琉球方言で認められるこの係り結びの現象は、また中世から近世へかけての古典語の係り結びの消滅という問題にもなんらかの手掛りを与えてくれるものと思われる。

そこで、以下琉球方言における係り結びについて考察する。

II du 助詞

1 du (ぞ) 助詞とかかわる活用形

du 助詞のかかりについて述べる前に、まず、du 助詞のかかりと深くかかわる活用語の活用形についてみることにする。

奄美・沖縄

奄美・沖縄で du 助詞のかかりと深いかわりをもつ活用形としては、終止形、連体形、du 係結形などがある。動詞「書く」を例にとり、これらの活用形をいくつかの方言で示すと、次のようになる。

奄美

	終止形	連体形	du 係結形
大島古仁屋	kakjur		
	kakjum	kakjun	kakjur
大島湯湾	kakjui		
	kakjun	kakjun	kakjuru

徳之島井之川

kaki, kakjuri

kakjun	kakjun	kakjuru
--------	--------	---------

徳之島亀津

kaki, kakjui

kakjun	kakjun	kakjunnu
--------	--------	----------

沖永良部島田皆

hakkimu	hakkinu	hakkiru
(hakkin)		

沖永良部島国頭

hatfumu	hatfunu	hatfuru
(hatfun)		

沖縄

伊是名島勢理客

katfun	katfunu	katfuru
--------	---------	---------

本部町渡久地

kakun	kakuru	kakuru
-------	--------	--------

本部町並里

kakun	kakun	kakuru
-------	-------	--------

本部町瀬底

hakun	hakun	hakuru
-------	-------	--------

東村有銘

katfun	katfunu	katfuru
--------	---------	---------

与那城村平安座

katfun	katfuru	katfuru
--------	---------	---------

具志川市上江冽

katfun	katfuru	katfuru
--------	---------	---------

浦添市小湾

katfun	katfuru	katfuru
--------	---------	---------

豊見城村饒波

katfun	katfunu	katfuru
--------	---------	---------

久米島儀間

katsun	katsuru	katsuru
--------	---------	---------

久米島西銘

katsun	katsuru	katsuru
--------	---------	---------

久米島島島

fiattsun	fiattsui	fiattsui
----------	----------	----------

先島

先島(宮古, 八重山, 与那国)では、du 助詞のかかりとかかわるのは、連用形、終止形、連体形である。それを示すと、次のよう

になる。

	連用形	終止形	連体形
宮古西里	kakī	kakī	kakī
		kakīm	
宮古大神	kakī	kakī	kakī
		kakīm	
八重山川平	kakī	kakī	kakī
		kakīn	
八重山石垣	kakī	kaku	kaku
		kakun	
与那国祖納	kati	kati	kagu
		kagun	

以上の諸例からもわかるように、これらの活用形においては、次のような特徴が見出される。

- (1) 奄美・沖縄では、終止形、連体形、du係結形が形のうえで区別を保っている。ただし、中には四角で囲んで示した活用形のうちに、区別のないところもある。
- (2) 先島では、連用形、終止形、連体形は形のうえで区別しない。ただし、m語尾系の終止形は区別されている。また、m語尾系の終止形以外に八重山石垣では連用形が、与那国祖納では連体形がそれぞれ区別を保っている。

2 du助詞のかかり

では、du助詞は実際にどうかかり方をするのか、次にみることにする。

奄美・沖縄

(1) <du~du係結形, 連体形>

奄美・沖縄では、<du~du係結形, 連体形>で示せるようなかかりうけ関係がある。

du助詞は、du係結形と呼応するのが普通である。ただし、地域によっては、du係結形と連体形がともにru語尾で、形のうえでの区別を示さないところがある（これらの地域には[▽]印を付す）。これらの地域では、du助詞はru語尾連体形と呼応しているともいえる。さらに地域によっては、du助詞はdu係結形と呼応すると同時にn語尾連体形にもかかるところがある（その地域には[▽]印を付す）。これらの用例を示すと、次のようになる。なお、du助詞はruの形であらわれるところもある。

奄美

[▽]大島古仁屋

dʒi: du kakjur (字ぞ書く。du係結形)

sihē: du t̄ahasar (酒ぞ高い。du係結形)

dʒi: du kakjun (字ぞ書く。連体形)

sihē: du t̄ahasan (酒ぞ高い。連体形)

大島湯湾

dʒi: du kajuru (字ぞ書く)

?arī ga du ?ikjuru (彼がぞ行く)

徳之島亀津

dʒi du kakjunnu (字ぞ書く)

ʔari ga du kjunnu (彼がぞ来る)

沖永良部島田皆

dʒi du hakkiru (字ぞ書く)

saki du ta:saʔaru (酒ぞ高い)

沖永良部島国頭

dʒi du hatfuru (字ぞ書く)

dʒi du jumiru (字ぞ読む)

沖 縄

伊是名島勢理客

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

ʔatfa ru tfu:ru (明日ぞ来る)

▼本部町渡久地

dʒi ru kakuru (字ぞ書く)

saki nu ru takafɛ:ru (酒がぞ高い)

本部町並里

dʒi ru kakuru (字ぞ書く)

ʔatfa: ru kuzru (明日ぞ来る)

本部町瀬底

dʒi ru haku:ru (字ぞ書く)

saki nu ru takafɛ:ru (酒がぞ高い)

東村有銘

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

ʔatfa ru tfu:ru (明日ぞ来る)

▼与那城村平安座

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

ʔatfa ru tfu:ru (明日ぞ来る)

▼具志川市上江洲

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

katfi ru su:ru (書きぞする)

▼浦添市小湾

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

ʔatfa ru tfu:ru (明日ぞ来る)

那覇 (注5)

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

ʔari ga ru tfurasaru (あれがぞ美しい)

豊見城村饒波

dʒi ru katfuru (字ぞ書く)

ʔatfa ru tfu:ru (明日ぞ来る)

▼久米島儀間

dʒi ru katsuru (字ぞ書く)

ʔuri ru takasa:ru (これぞ高い)

▼久米島西銘

dʒi ru katsuru (字ぞ書く)

saki nu ru takasaru (酒がぞ高い)

▼久米島鳥島

dʒi ru fiattsui (字ぞ書く)

ʔatfa: ru tfui (明日ぞ来る)

saki ru takasai (酒ぞ高い)

(2) <du~終止形>

奄美・沖縄では、du 助詞は du 係結形や連体形と呼応する以外に、系統の全く異なる終止形と呼応する場合もある。

奄美

大島古仁屋

dʒi: du kakjun (字ぞ書く)

大島湯湾

dʒi: du kakjun (字ぞ書く)

ʔatʃa du kju:n (明日ぞ来る)

徳之島亀津

dʒi: du kaki (字ぞ書く)

dʒi: du kakjui (字ぞ書く)

dʒi: du kakjun ʃe: (字を書くのか)

沖永良部島田皆

tui nu tudunu gutu du ʔa:mu (鳥が飛んでいることぞある。鳥が飛ぶみたいだ)

saki du ta:saʔa:mu (酒ぞ高い)

沖永良部島国頭

dʒi: du hatʃun dja: (字ぞ書くよ)

dʒi: du jumimu 字ぞ読む

沖繩

本部町渡久地

kaku ʃi ru jaʃʃen (書くのぞやすい。書くのが簡単なのだ)

本部町瀬底

dʒi: ru hakun jo: (字ぞ書くよ)

saki nu ru takafem jo: (酒がぞ高いよ)

那覇

ʔmmu ru kamun ro: (芋ぞ食べるよ)

sui kai ru jan re: (首里へぞであるよ。首里へ行くんだよ)

久米島鳥島

dʒi: ru ʃattsun jo: (字ぞ書くよ)

ʔatʃa: ru tʃun jo: (明日ぞ来るよ)

saki ru takasan (酒ぞ高い)

先島

(1) <du~連体形>

先島(宮古, 八重山, 与那国)でも、du 助詞は連体形と呼応する。ただし、この連体形は、奄美・沖縄の連体形とは系統を別にする。以下、それらの用例を示す。

宮古西里

kaka i du ssi (書かれぞする。書くことができる)

kaka i ba dzo:kai (書ければぞよい。書くことができればよい)

宮古与那覇

kari ga du iki padzi (彼がぞ行くはず。彼が行くはずだ)

kakī du ssi (書きぞする。書くのだ)

宮古大神島

a ʒa ɖu kakī (私がぞ書く)

ja: n ɖu uī (家にぞいる)

八重山川平

dzi kaki du urī (字書きぞいる。字を書いている)

uwa du tyɣi biki (君がぞ取るべきだ)

与那国祖納

di: du kagu (字ぞ書く)

a ɲa du ɕiru (私がぞ行く)

sagi ɲa du taɲaru (酒がぞ高い)

(2) <du~連体形以外の形式>

du 助詞が連体形以外の形式にかかる場合がある。次にその用例を示す。

宮古与那覇

ati takakari ba du bugari nja:n (あまり高ければぞ疲れてしまった。あまり高いので疲れてしまった。終止形)

anfina: du takaka tsjka: ka: ru n (そんなにぞ高かったら買えない。条件形)

宮古大神島

gɣi: u ɕu kaki (字をぞ書いた。過去形)

kɣnu ɕu iki (昨日ぞ行った。過去形)

mmaɲa n ɕu kaka ʃi (孫にぞ書かせなさい。命令形)

八重山川平

川平では終助詞がついた形式にかかる。

uma he: ja paɣi gurifa du assa (そこへは行きにくくぞあるよ。そこへは行きにくいよ)

kaki du urɣi dura: (書いてぞいるよ。書いているよ)

与那国祖納

祖納では、m語尾系の終止形にかかる例がある。

kaiti du ɕirun (買ってぞ行く。買って行くのだ)

unti mɸufiti gara du ɕirun (芋を蒸してからぞ行く。芋を蒸してから行くのだ)

3 du 助詞のかかりの弱まり

以上示してきた実態に基いて、以下、du 助詞のかかりについて考察する。

奄美・沖縄

(1) <du~du 係結形>について

まず、奄美・沖縄では、du 助詞は一般に du 係結形と呼応する。du 係結形は普通 ru 語尾をとるので、<du~ru 語尾>の呼応関係といえよう。たとえば、奄美の古仁屋では、kakjur (書く)、tɲhasar (高い)、沖縄那覇では、katfuru (書く)、tʃurasaru (美しい)の形であらわれる。

この ru 語尾は「居る」「ある」の「る」に対応するものである。du 係結形は、動詞の場合は「連用形+ラル」、形容詞の場合は「形容詞語幹+サアル」から成立している。たとえば、「書く」の場合には、*kakiworu (書き居る)→kakjuru (湯湾)、kakjur (古仁屋)→katfuru (那覇)となっている。「高い」や「美しい」の場合は、*takasaaru (高さある)→tɲhasar (古仁屋)、*kijorasaaru (清らさある)→tʃurasaru (美しい。那覇)となっている。このように、du 係結形の成立をみれば、du 助詞がなぜ ru 語尾と呼応するのかがよく理解される。要するに du 助詞は接尾辞的に用いられた「居る」「ある」の連体形語尾「る」と呼応しているのである。

以上のように、奄美・沖縄のほとんどの地域では、du 助詞は ru 語尾と呼応するが、この ru 語尾が「居る」「ある」の連体形語尾に対応するものであるならば、国語史的にみてこの呼応関係は首肯で

きる。

(2) <du~連体形>について

du 助詞は、奄美・沖縄で、du 係結形と呼応する以外に、連体形とも呼応する。連体形は、奄美・沖縄では、ru 語尾か n 語尾または nu 語尾をとってあらわれる。それらの中で、du 助詞と関係するのは、ru 語尾と n 語尾である。

du 助詞が ru 語尾連体形と呼応するところは、既に示したように、沖縄の本部町渡久地、与那城村平安座、具志川市上江列、浦添市小湾、久米島の儀間、西銘などである。ru 語尾連体形は、du 係結形と同系統のものである。すなわち、動詞の場合は「連用形+ヲル」、形容詞の場合は「形容詞語幹+サアル」から成立している。これからもわかるように、ru 語尾連体形と du 係結形とは全く同じものである。同じものを別々の活用形としたのは、他の方言で連体形と du 係結形が形のうえで区別を保っているから、その区別に合わせたためである。このようにみえてくると、du 助詞が ru 語尾連体形と呼応する <du~ru 語尾連体形>は、du 係結形の場合と同様に、至極納得のいくものである。

du 助詞が n 語尾連体形にもかかるところは、奄美の古仁屋である。ここでは、du 助詞は du 係結形と呼応すると同時に、n 語尾連体形にもかかる。では、この現象はどう理解したらよいのであろうか。これは、やはり du 助詞のかかりの弱まりをおいて他には説明の方法がない。すなわち、古仁屋でも、もとは沖縄の本部町渡久地や与那城村平安座などと同じように、du 係結形と連体形は区別がなく、ともに ru 語尾であったものと解される。すなわち、<du~ru 語尾連体形>の呼応関係であったであろう。それがやがて du 助

詞のかかりの力が弱まるようになると、それと呼応する語に対する制約も当然ゆるやかになる。その結果、ru 語尾は n 語尾に変化する。すなわち、<du~n 語尾連体形>の関係が成立することになる。このようにして成立した n 語尾は、連体形としてののはたらきを一手に担うとともに、また du 助詞のかかりをも拒否するものではなかった。古仁屋で、du 助詞は du 係結形と呼応すると同時に、n 語尾連体形にもかかるという現象は、このように解してはじめて納得のいくものとなる。

同じく <du~連体形>の構造を示しながらも、これまでのものとは系統を異にするのが久米島の烏島である。烏島の連体形 (du 係結形も同じ) は、動詞の場合は「連用形+ヲリ」、形容詞の場合は「形容詞語幹+サアリ」から成立している。すなわち、fiattsui (書く)、takasai (高い) は、*kakiwori (書き居り)、*takasaari (高さあり) から成立している。この構造は、先島方言に通ずるが、先島については後述する。

(3) <du~終止形>について

奄美・沖縄では、du 助詞は連体形 (または du 係結形) とは全く系統の異なる終止形にもかかる。その実例についても既に示した。

奄美・沖縄の終止形は連体形とは全く別系統のものである。たとえば、徳之島井之川方言では、「書く」の終止形に kaki, kakjuri, kakjun の三つの形が認められる。これらは、それぞれ *kaki (書き)、*kakiwori (書き居り)、*kakiworimu (書き居りむ) から成立している。kaki のように、「連用形」に対応する終止形は、奄美・沖縄では徳之島にのみあらわれる。奄美諸方言では、主に kakjuri, kakjun のように、「連用形+ヲリ」「連用形+ヲリム」に対応する

終止形があらわれる。沖縄では「連用形+ヲリム」系統のものだけがあらわれる。この「連用形+ヲリム」系統の終止形は、n 語尾をとる場合が多く、そのために外形上は n 語尾連体形としばしば一致するが、系統的には以上みてきたように全く別のものである。

さて、<du~du 係結形><du~連体形>の構造は、中古を中心として行なわれた係り結びと軌を一にするものであることについては既に述べた。また、その中で、<du~n 語尾連体形>の成立の過程を通して、du 助詞のかかりの力の弱まりについても指摘した。では、du 助詞が全く別系統の終止形にもかかる<du~終止形>の現象は、どう解したらよいであろうか。

これもやはり du 助詞のかかりの力の弱まりをおいて他には説明のしようがない。du 助詞は ru 語尾 (du 係結形, ru 語尾連体形) で結ぶのが本来の姿であった。そこで、du 助詞のかかりの力がはたらいっている間は、ru 語尾も保持される。しかし、du 助詞のかかりの力が弱まると、その結びに対する制約も当然ゆるやかになる。その結果、ru→n の変化が起こり、従って n 語尾連体形の成立という現象もあらわれ、さらに系統を別にする終止形へのかかりという現象もあらわれてきたものと解される。また、ru 語尾が n 語尾に変化すると、n 語尾連体形は終止形と外形上一致する場合が多い。奄美大島湯湾、徳之島の井之川、亀津、沖縄の本部町並里、瀬底などでは、終止形と連体形は外形上一致する。この外形上の一致も、du 助詞が終止形へかかるはたらきを促進するものとなったであろう。

先 島

(1) <du~連体形>

先島では、du 助詞は普通連体形と呼応する。ただし、この連体形は、いわゆる国語の連用形に対応するものである。先島では、連体形だけでなく、連用形、終止形も国語の連用形に対応する形式から成立している。たとえば、「書く」でいうと、宮古西里の連用形 kakī, 終止形 kakī, 連体形 kakī, 与那国祖納の連用形 kati, 終止形 kati, 連体形 kagu は、すべて*kaki (書き) から成立している。ただし、m 語尾または n 語尾の終止形は*kakimu (書きむ) から成立している。久米島の連体形語尾が接尾的に用いられた「居り」「あり」に対応することについては既に述べたが、先島と同じように、これもいわゆる国語の連用形に対応するものであるという点で興味深い。

さて、先島では、du 助詞は連体形と呼応しているが、その連体形は連用形や終止形と系統を同じくし、まだ現在でもこれら三つの活用形は、同形であるところが多い。いわゆる、連用形、終止形、連体形が同形であっても、先島では du 助詞が文中でよく用いられているのである。これからすれば、du 助詞は先島でもある特定の形式と呼応関係を構成するところに本質があるのではなく、むしろ強調の意を表わすところにその目的があるのではなかろうか。

(2) <du~連体形以外の形式>

先島でも du 助詞は連体形以外の形式にかかっていく現象がある。既に示したように、宮古与那覇では条件形にもかかり、大神では過去形や命令形にもかかる。与那国祖納では、n 語尾終止形にもかかる。もし、du 助詞にある特定の形式と呼応関係を構成する力

を認めるならば、これらの現象は説明がつかない。先島においては、*du* 助詞はむしろ奄美・沖縄以上に呼応関係を構成する力を失なっているものと解される（注6）

III ga 助詞

1 ga (か) 助詞のかかり

du 助詞のかかりの他に、*ga* (か) 助詞のかかりもある。すなわち、 $\langle ga-ga$ 係結形 (ra 語尾) \rangle の呼応である。これは沖縄方言を中心として用いられているが、沖縄方言に比較的近い奄美の沖永良部方言にもみられる。以下その例を示す。

奄美

沖永良部島田皆

- dʒi: ga hakkira ja:* (字を書くのかしら)
tʃʷu ga ki:ra (人が来るのかしら)
ʔuduru ga ga taasaʔa:ra (どれが高いかしら)

沖永良部島国頭

- dʒi: ga hatʃura* (字を書くのかしら)
ʔuduru ga ga takasaʔara (どれが高いだろうか)

沖縄

伊是名島勢理客

- nu: ga katʃura* (なにを書くのかしら)
nu: ga junura (なにを読むのかしら)

本部町渡久地

- dʒi: ga kakura* (字を書くのかしら)

- tʃu: ga ku:ra* (人が来るのかしら)
nu: ga ga takafɛ:ra (なにが高いのかしら)

本部町並里

- dʒi: ga kakura* (字を書くのかしら)
ʔuttu ja ʔitʃi ga ku:ra (弟はいつくるのかしら)

本部町瀬底

- dʒi ga haku:ra* (字を書くのかしら)
ʔattʃa: ga ku:ra (明日来るのかしら)
nu: ga ga takafɛ:ra (なにが高いのかしら)

東村有銘

- ʔama nti ga katʃura* (あそこで書くのかしら)
ʔatʃa ga tʃu:ra (明日来るのかしら)

与那城村平安座

- dʒi: ga katʃura* (字を書くのかしら)
kunu ʔju: ja tʃassa bika: ga sura ja: (この魚はいくらばかりするのかしら)

具志川市上江洲

- dʒi: ga katʃura* (字を書くのかしら)
dʒi: ga jumura (字を読むのかしら)

浦添市小湾

- dʒi: ga katʃura* (字を書くのかしら)
ʔuttu ja ʔitʃi ga tʃu:ra (弟はいつ来るのかしら)

那覇

- dʒi: ga katʃura* (字を書くのかしら)
ta: ga tʃurasara (誰が美しいのかしら)

豊見城村饒波

dʒi: ga katfura (字を書くのかしら)

ʔatʃa ga tʃura (明日来るのかしら)

久米島儀間

dʒi: ga katsura (字を書くのかしら)

ʔatʃa ga tʃura (明日来るのかしら)

nu: ga takasara (なにが高いのかしら)

久米島西銘

dʒi: ga katsura (字を書くのかしら)

ʔatʃa ga tsu:ra (明日来るのかしら)

saki ga ga takasara (酒が高いのかしら)

2 ga 助詞のかかりの弱まり

以上示したように、ga 助詞は ra 語尾 (ga 係結形) と呼応する。中古の国語では、カは連体形と呼応する。しかし、この ga 助詞と呼応する ra 語尾活用形 (ga 係結形) は、いわゆる国語の連体形に対応するものではない。では、この ra 語尾活用形の素姓はなんであろうか。

結論から先に言えば、この ra 語尾活用形は、国語の未然形に対応するものであろう。たとえば、那覇方言の「書く」「美しい」の katfura, tʃurasara は、それぞれ *kakiwora (書き居ら), *kijora-saara (清らさあら) から成立しているものと解される。すなわち、接尾辞的に用いられた「居る」「ある」の未然形に対応するものであろう。

ra 語尾活用形が未然形に対応するものであるならば、<ga~未

然形>という呼応関係を認めざるをえないが、しかし、これは国語史的にみて、あまりにも特殊である。これは、<ga~未然形>の呼応ではなく、おそらく<ga~連体形>の変化したものと解される。たとえば、那覇方言の dʒi: ga katfura (字を書くのかしら) の katfura に例をとると、これはたしかに *kakiwora (書き居ら) に対応するが、それ以前は意志・推量の助動詞「む」の連体形に対応する形式が複合していたのではなからうか。すなわち、*kakiworamu (書き居らむ) → *kakiworan → *kakiwora と変化したものであろう。助動詞「む」の連体形に対応する形式が脱落したわけである。こう解釈すると、ga 助詞ももと<ga~連体形>の呼応関係を構成していたことになる。

本部町瀬底では、nu: haku: ga (なにを書くのか) と、ga 助詞を文末においた疑問表現は、相手への問いかけであり、相手の答えを求め、それを期待する表現形式である。これに対して、nu: ga haku:ra (なにを書くのかしら) と、ga 助詞を文中においた呼応表現は、自問であり、必ずしも相手の答えを求めるものではない。ある現象に対して、あれこれ推し量りつつもなお疑問を抱く場合に用いられる表現形式である。これからすると、やはり ra 語尾の後には助動詞「む」の連体形に対応する形式が複合していたものと解される。

では、なぜ「む」(連体形) に対応する形式が脱落したのかということであるが、これもやはり ga 助詞のかかりの力の弱まりによるものであろう。かかりの力がはたらいおれば「む」(連体形) に対応する形式は保持されるはずである。これが脱落するということは、ga 助詞の結びに対する呼応力が弱まったことを意味する。

ga 助詞はほぼ一定して<ga-ra 語尾>のかかりうけ関係を取り、ra 語尾以外の形式にかかることはない。これは、既に「む」に対応する形式をおとしているために、これ以上変化を起こすと、自問としてのこの表現形式の喪失につながりかねないからであろう。

IV まとめ

琉球方言で用いられている du 助詞のかかりについては、次のようにまとめることができる。

- 1 奄美・沖縄では、終止形と連体形は現在区別を保っており、系統的にも異なるものである。さて、du 助詞は、普通<du~du 係結形（または連体形）>のかかりうけ関係を構成するが、また終止形へもかかる。
- 2 先島（宮古・八重山・与那国）では、終止形と連体形は、現在ほとんどの地域で同形であり、系統的にも同じものである。その中で、du 助詞は比較的よく用いられ、普通は<du~連体形>のかかりうけ関係を構成するが、また、系統の異なる n 語尾終止形（与那国）や命令形（大神）などへもかかる。
- 3 以上のことからして、du 助詞は、もとはかかる力があって、かかる語と密接な呼応関係を構成していたものと考えられるが、現在はその力は弱まっているとみられる。
一方、ga 助詞のかかりについては、次のようにまとめることができる。
- 1 ga 助詞は、もと<ga~未然形+助動詞「む」の連体形>のかかりうけ関係を構成していたと解される。従って、ga 助詞も基本的には連体形結びであった。

2 しかし、結びの形式で、後に助動詞「む」が脱落し、現在は<ga~未然形>のかかりうけ関係を構成している。

3 末尾の「む」が脱落したのは、ga 助詞のかかりの力が弱まったためであると解される。

以上のように琉球方言における助動詞 du（ぞ）、ga（か）には明らかにかかりの力の弱まりが認められる。はじめにも述べたように、国語の係り結びの消滅は、係助詞がかかりの力を失ったからだともいわれる説がある。琉球方言の立場からみれば、妥当な見解である。

注

- 1 石田春昭 1939年2月、3月「コソケレの本義（上・下）（『国語と国文学』）
大野晋 1955年 「日本古典文法（1~10）」（『解釈と鑑賞』12月から10回連載）
大野晋 1978年 「日本語の文法を考える」 岩波書店
- 2 大野晋 1977年 「日本語の助動詞と助詞」（『岩波講座日本語7』 岩波書店 23頁）
西田直敏 1977年 「助詞（1）」（『岩波講座日本語7』 岩波書店 240頁）
- 3 安田章 1977年 「助詞（2）」（『岩波講座日本語7』 岩波書店 339—347頁）
- 4 北原保雄 1982年 「係り結びはなぜ消滅したか」（『国文学』12月 学燈社）
- 5 野原三義 1984年 「沖縄那覇方言の係助詞・副助詞—琉球方言の鳥瞰を含む—」（『現代方言学の課題』第2巻 平山輝男

博士古稀記念会編 明治書院)。以下那覇方言については当文献による。

- 6 柴田武 1976年 「沖縄県平良市方言の付属語 du および nu, ga について」(『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜風社)。当文献では、duに「文を前後に二分し、前と後とを対照させて叙述する」構文的はたらきを認めている。「係り」による呼応関係については、動詞に終止形と連体形の区別がないので、確認はできないと述べている。